

「特集」

文〓山田清機 協力〓玉蟲敏子

東京さんぽ 琳派と千住宿

24 京都から江戸、そして——琳派の系譜

28 江戸郊外で花開いた 千住の琳派

34 開宿400年 千住宿さんぽ

41 東京さんぽ 琳派と千住宿〔案内図〕



大人が集う「飲み屋横丁」で。地口行灯(くちあんどん)がともる路地に、宿場町のにぎわいが重なる(39頁)

Interview しなやかな挑戦 文〓森綾

16 伊原六花 〔俳優〕

特別企画 漫画家とびたのゆるグルメ旅

54 広島・尾道でラーメンぶらり。 〔広島県尾道市〕

9 京都の路地まわり道 文〓千宗室

赤帽のいた頃

13 ひとときエッセイ「そして旅へ」

文〓橋本幸士

旅の定義

15 諸国名産お国言葉採集 文〓篠崎晃一

てげ 〔宮崎県〕

柳家喬太郎の旅メシ道中記

43 角南製造所

清水白桃の缶詰

44 地元でエール これ、いいね！

杉原紙 〔兵庫県多可郡多可町〕

おいしいもんには理由がある

46 文〓土井善晴

江戸前の寿司仕事 〔東京都中央区〕

50 サンキュー！マイ★スター 文〓サンキュータツオ

工藤勤 〔ボック靴職人〕

Special Article

79 Ekinaka Hot Spot

〔Shinagawa Station〕

58 旬 News & Topics

60 美 Art & Entertainment

62 遊 Event & Festival

旅の小箱 from J R 西日本、J R 東海

64 歴史と美食を堪能する山口旅へ

65 味と器で魅せる加賀温泉の美食旅

66 スマートEX利用で WESTER ポイントがたまる！

67 ばけバスー小泉八雲とセツ

ゆかりの地を訪ねて

68 名古屋 JR ゲートタワーホテルで

心安らぐひとときを

69 名鉄×JR 東海のコラボ商品が登場

70 「そうだ 京都、行こう」キャンペーン秋編

紅葉に染まる東福寺で過ごす特別な秋

71 「いざいざ奈良」キャンペーン×Quiz Knock

いざ、奈良を巡る謎解き旅へ

72 ひととき倶楽部

読者からのお便り 今月のプレゼントなど

74 次号のお知らせ

80 東海道・山陽新幹線時刻表



白菊図屏風(部分) 千住の琳派絵師・村越向栄(こうえい)の作品 70.5×169.0センチ(全体) 個人蔵 写真=阿部吉泰(上も)

特集

東京さんぽ 琳派と 千住宿

月次景物図（部分）

村越向栄（こうえい） 接骨業で全国的に名を馳せていた千住の旧家・名倉（なぐら）家に伝わった景物図（七月：秋草に流水図と十月：鳶に百舌図）。酒井抱一（ほういつ）が創始した、月ごとに花鳥を1図ずつ描いて12図1組とする「十二ヵ月花鳥図」の流れを受け継ぐ。本作品は表装されていない状態で見つかり、作画後の仕立て方は、注文主に委ねられていた可能性がある。明治時代 各104.5×39.3センチ 足立区立郷土博物館蔵



東本願寺門跡の行列が大橋（現・千住大橋）を渡っている図で、左の手前に千住橋戸町〈はしどちょう〉、奥には千住河原町〈かわらちょう〉が描かれている。大橋は、江戸に入府して間もない初代将軍・徳川家康の命により、初めて隅田川（当時入間川、のちに荒川）に架けられた。橋は1594（文禄3）年に完成し、1625（寛永2）年には千住宿が開宿した。大橋は江戸の名所として、しばしば浮世絵に登場する 橋本貞秀 1865（慶応元）年 足立区郷土博物館蔵



日光御街道千住宿

日本無類楠橋杭之風景

本願寺行粧之図

それは2009（平成21）年のこと。

東京都足立区千住^{せんじゅ}、一軒の旧家で、

琳派^{りんぱ}の作品が確認されました。

この出来事が呼び水となり、

足立区で文化遺産調査が始まりました。

すると、千住を中心に、

琳派の作品が50点ほど発見され、

日本美術史の界限でも、

大きな波紋を呼びました。

もともと京都で萌芽^{ほうが}した琳派が、

どのようにこの町に伝わり、

花開いたのでしょうか。

足立区立郷土博物館へ足を運び、

さらに、今年で開宿400年を迎える

千住宿の歴史を訪ねて町を歩きます。

文＝山田清機 写真＝阿部吉泰 協力＝玉蟲敏子
Yamada Seiki Abe Yoshitiro Tamamushi Satoko

金泥の葉脈！



村越向栄 千住で初めて見つかった琳派作品。抱一・其一の様式を汲む 上段右から、一月：白梅図 二月：椿に菫（すみれ）図 三月：桜に小禽図 四月：芥子（けし）図 五月：卯花に杜鵑（ほととぎす）図 六月：立葵図 七月：朝顔・女郎花（おみなえし）・撫子図 八月：満月に夕顔図 九月：白膠木（ぬるで）・菊・薄（すすき）図 十月：楓図 十一月：寒牡丹に水仙図 十二月：雪松図 明治時代 各120.0×46.0センチ 足立区立郷土博物館蔵

薄墨を駆使して月光を表現！



なのだろう。日本美術に不案内な筆者でも、尾形光琳こうりんぐらいは知っているが……。

「琳派」というのは光琳派の略称で、もともと明治の中頃に出てきた言葉なのです。フランスのジャポニストたちが日本美術の文献を訳す時に『エコール・ド・コリン』という表現を使った。これが光琳派という言葉の始まりです。それ以前に、日本でこの流派を系譜づけたのは江戸の琳派

の絵師、酒井抱一ほういつですが、抱一は『尾形流』という言い方をしていました」

玉蟲教授によれば、琳派は江戸幕府お抱一の狩野派のように、そもそも師弟関係で結ばれた一門ではないという。

俵屋宗達、尾形光琳、尾形乾山、酒井抱一という琳派の系譜は、あくまでも様式の継承であり、狩野派が粉本ふんぽんというお手本を弟子に学ばせたのとは違って、琳派をつ

なげたのは先人への憧れだ。

「ただし、抱一と一番弟子の鈴木其一は、直接の師弟関係です。千住に定住した其一の弟子が村越其栄きえい、その息子が幕末から明治の末にかけて活躍した村越向栄ですから、つまり千住の琳派は酒井抱一の孫弟子、ひ孫弟子によって担われたわけです」

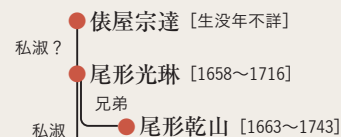
ということとは、千住の琳派は抱一に始まる江戸の琳派の末裔まつえいということになる。

「たしかに、画題に月次の草花が多いとか銀屏風が多いといった、江戸の琳派の得意とした様式を引き継いでいますが、其栄、向栄父子が千住という特徴ある町に定着して、地元有力商家や豪農たちと交流する中から発展させ、繁栄してきたものですから、江戸の琳派の末裔というより、『千住の琳派』と地域名を冠したネーミングをするべきだと私は思うのです」（玉蟲教授）

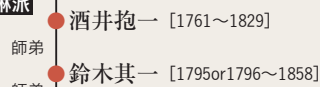
千住の琳派、そこまでは思わなかった。

琳派の系譜（略図）

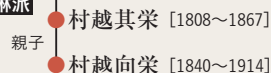
おもに京都で活躍



江戸の琳派



千住の琳派



開宿400年

千住宿 さんぽ

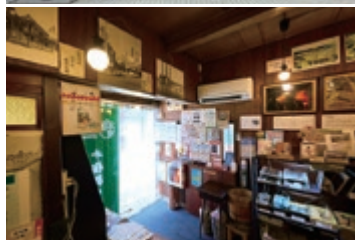
千住宿の開宿400年を
記念するフラッグが、
町を彩っている



江戸四宿のなかで、
宿場町の面影が最も残る千住宿。
開宿400年の節目、
江戸と令和が交錯する
賑わう町を歩きます。

千住の琳派を育んだ千住の町を、NPO
法人千住文化普及会代表の櫛原文夫さんと
一緒に歩いた。

最初に訪ねたのは、ほぼ南北に走る旧日
光街道の北側、宿場町商店街にある横山家
住宅である。伝馬役も務めた富裕な地漣紙
(再生紙)問屋だった横山家は、狩野派や
谷派の美術品を数多く所有していた。江戸
後期の築造で、街道に面した柱には敗走す
る彰義隊が残した刀傷が残っている。



旧日光街道の宿場町通り
[右] 商店街として終日賑わっている。道幅は江戸時代から変わらず約7メートル [左上] 右の建物は「千住 街の駅」で、休憩にも使える観光案内所 (左下の写真が屋内)。通り沿いには、自転車が1台通れる程度の細い路地が数多くあり、歩きながら江戸時代の地割りを体感できる



「店構えを見て、何か気がつきませんか。街道よりも戸口が一段低くなっているでしょう。客を上から見下ろさないというのが、江戸時代の商家の伝統なんです」

宿場町商店街を隅田川方向に南下していくと、商店と商店の間に必ず細い通路があり、各商店は街道と直角の方向に長い短冊形をしているのが見て取れる。宿場町時代の地割りが、そのまま残っているのだ。

「宿場町では神社仏閣を宿場の裏につくり

ました。宿場との境界には悪水路という水路がありましたが、要するに下水道です」
一段高い街道から細い通路を伝って流れてきた雨水は、悪水路に流れ込んで排水される。街道を乾かすための工夫である。

文人、絵師らが 往来した町

墨堤通りに突き当たって交差点を東に折



「千住文化普及会」代表の櫛原さん。千住大橋近くで生まれ育ち、千住文化を継承する活動に力を入れている。松尾芭蕉の像(39頁)の前で

「千住宿」開宿400年

「古きよき」千住の
未来へ向けて

「千住いえまち」は、“千住らしさ”を残す・作る・繋ぐことを目指して活動する団体。会長の鶴巻俊治さんに話を伺った。「昭和以前の建造物や路地など千住は魅力的な景観が残っていますが、時代の流れで失われつつあります」。鶴巻さんたちは、世間の風を読みながら新しい波を起こす。「たとえば地口行灯くじぐちあんどん」(地口に絵を添えた行灯。“地口”とは洒落、ことば遊びの一種)。千住では古くから祭礼の時に飾られていましたが、この行灯で町を彩る活動などを行っています(写真・同頁下)」。これはほんの一例で、古民家の再生や活用、イベントなどを通じて地域を盛り上げて、千住をアップデートさせている

[上]近年は路地裏グルメも充実
[下]大正末期建造の質屋の蔵を活用した「喫茶 蔵」と鶴巻さん

今秋は「千住宿」へ！ 開宿400年関連イベント

● まちなか展示 11/1～30

千住にゆかりのある美術作品のレプリカを町なかに展示する 国足立区立中央図書館、仲町の家、ルミネ北千住、お休み処 千住街の駅など計10カ所程度(予定)

● 巡って探せ! 千住宿の秘宝 ～12/12

北千住駅周辺でさまざまなクエストに挑戦し、宝を見つけるイベント。インターネットに接続可能な端末が必要(スマートフォン・タブレットなど)



日暮れの「飲み屋横丁」。昔ながらの路地に新旧の店が立ち並び。地口行灯や通りのネオンが、ひとつまたひとつと灯り始めるのが、長い夜の始まりの合図だ



芭蕉が旅の始まりの句を詠んだ千住大橋のたもとで。「ここは出会いと別れの地。『おくのほそ道』には、旅立ちの地として千住の情景が記されているんですよ」と櫛原さん

少し東に引つ込んでるのも同じ理由。ところで、北千住はあくまでも駅名であって地名じゃないからね。そこを絶対に間違えないでよ。ここはセ、ン、ジュなの」
プチテラスを後にして、さらに隅田川方向に進むと、足立市場の入り口横に佇む松尾芭蕉の像が見えてきた。しかし、どうも一般的な芭蕉の像とは様子が違う。櫛原さん

んはこの像の建立にかかわったひとりだ。「実はね、石屋さんにふくよかな芭蕉さんにしてほしいってお願いしたんですよ」
芭蕉といえば俳聖である。枯れた老人のイメージが強い。しかし、芭蕉が奥の細道に旅立ったのは45歳なのである。「体力も養って準備万端整えてというのが、旅立つ時の芭蕉の姿だったと思うんです」。

奈良時代から伝わる最高技術で漉く

杉原紙

兵庫県多可郡多可町



橘 大地さんのブランド「HALOP」の杉原紙製品。奥からマルチトレイ、ペンケース、トライアングルコインパース

途絶えたと思われていた1300年の伝統が、細い糸のように残されていた。町の人たちの熱意がそれを復活させ、そして「杉原紙」は町の誇りとなった。

兵庫県多可町で育つ楮は、内皮が他産地のものよりも白い。その白さを生かした自然な美しさと、柔らかな手触りが杉原紙の特長だ。この良さをもっと日常的に、手元で感じてもらいたいと、バッグやポーチなどの製品化に取り組んでいるのが橘大地さんである。

「これほど美しく丈夫なら、文字を書く以外の分野でも活用できるのではないかと考えました。紙ならではの軽さも喜ばれています」

杉原紙は奈良時代以来の技術を継承し、かつては和紙の中でも最高級品とされた。その技術で漉いた他地方産の紙が「○○（産地名）杉原」という名称で出回り、「杉原」＝「和紙」であったほど。

江戸時代に生産のピークを迎えたものの、明治期に機械生産の洋紙が日本に上陸すると一気に衰退の一途をたどっていく。大正末期には最後の1軒が紙漉きをやめ、以後長く、杉原紙は発祥の地さえ

文＝瀬戸内みなみ 写真＝伊藤信
Setouchi Minami Ito Makoto

昆寿司の寿司は端正。左から、艶やかな香りのマグロ赤身、ほどよく酢締めした小肌、丁寧な下拵えの後、ふっくらと煮上げた穴子

おいしいもんには
わけ
理由がある

第83回

文 土井善晴
Doi Yoshinaru
写真 岡本寿
Okamoto Hisashi



江戸開府以来の商業地域として賑わいの面影を残す日本橋人形町に、江戸前の心意気を継ぐ「**崋寿司**」があります

江戸前の寿司仕事

《東京都中央区》



「夫婦でときどきこちらにお邪魔するんです」。ところどころに古い建物が残り、江戸情緒を残す人形町の瀟洒なたたずまいとご主人・油井一浩さんの誠実な仕事ぶりに惹かれ、折にふれて崋寿司に寄るといふ土井さん。この日も午後からの取材時間より早く一人店に入り、昼食に「おきまり」を楽しんだそう。崋寿司の店内は1階にカウンターとテーブル席、2階は30名ほどの宴会もできる広間のテーブル席になっている

どい よしはる／1957年、大阪府生まれ。料理研究家、十文字学園女子大学副学長。NHK「ぎょうの料理」に出演。『一汁一菜でよいという提案』（新潮社）、当連載をまとめた『おいしいもんには理由がある』（ウェッジ）など著書多数。

明治後期、江戸前寿司の開祖といわれる「**與兵衛すし**」の弟子のもとで修業をした油井**崋太郎**が東京・柳橋に開業したのが**崋寿司**。長男の貫一は、関東大震災のあった1923（大正12）年、花街だった日本橋**芳町**（現在の日本橋人形町）で同名の**崋寿司**を開きます。以来、先代の隆一さん、そして、今の一浩さんで4代目になります。

昭和の初めに建てられた木造で、出桁の軒がある2階建ての館は、花街らしい風情を残します。時代がついた建物にピシッとした江戸仕立ての簡素な麻の夏暖簾がスツキリとかがります。こうしたしつらいに身を引き締められ、馴染みの客でない私は、引き戸を開けて入る一瞬に緊張するのです。江戸前の寿司屋にはこの感覚がないといけません。寿司屋は火入れのない生をかわせるところ。ピリッとしていないとなにかしら気持ちが悪い。一步中に入ると、大袈裟に聞こえるかもしれませんが、草原のような清涼の気。確かな仕事の証明です。

白木のカウンターに腰掛けて、親方と目を合わせて会釈して、迎えられたと、ホッとします。周りをちょっと見渡して、冷蔵

ケースのネタをさらりと眺めたとき、ようやく落ち着くのかなあ。

私の場合、寿司屋は親と一緒にいくところ。大人になってからもなかなか。暖簾をくぐるには、仕事を頑張つて人間的成長の自覚が必要でした。

さて、今日は、**崋寿司**に伺って、江戸前寿司の取材です。私は、大阪の人ですが、東京に暮らして30年、すっかり大阪弁も抜けてしても、握りは手やなしにお箸で食べて、江戸前の寿司をわかったつもりでおりますが、どないでしょ（笑）。

崋寿司のカウンターに座ると、板場に立つ親方の後ろにシンクがあつて、その上に、明かり取りの木枠のガラス窓が天井まであるのです。おかげで昼間は自然の光で、人も、お寿司もきれいに見えるんです。その隣にある冷蔵庫は毎日柔らかな布巾で拭き込まれ、ピカピカです。寿司ネタを書いた木札も、全部昔のままで風情があつて、うまく言えませんが、ほんま心地よい、美しいもんですね。「空襲でもこの一画は焼けなかった」そうなのです。それは本当に良かったなあ、もうこんな寿司屋はどこにも

漫画家とびたのゆるグルメ旅 広島・尾道でラーメンぶらり。

気ままなひとり旅が趣味の漫画家の高田ハジメさんが
人生初訪問となる、海と坂とラーメンの町・尾道へ。
旅先で出合った小さな感動をペンに載せてお届けします！

1泊2日
広島・尾道の
風景を味わいに
気ままなひとり旅に
やってきた



尾道駅前を散策
ノスタルジックな
空気に癒やされる

穏やかな
瀬戸内海を望む
港と坂の町…



尾道ラーメン
丸ぼし



とびた はじめ／旅と風景といきもの（特に鳥）が好きな漫画家。『まいにち鳥びより』『ぼっち旅～人見知りマンガ家のときめき絶景スケッチ～』（いずれもフレックスコミックス）好評発売中